チェルヌィシェフスキーと第一次「土地と自由」

――スレプツォーフの『回想』を中心として――

石川郁男

スレプツォーフ（Александр Александрович Слепцов, 1835―1906）の『回想』[1]がЛ・Ф・パンチェレーエフの『回想』とともに現在の研究段階でも不明な点の多い第一次「土地と自由」についての数少ない原資料の一つであることは周知のところである。本稿はスレプツォーフの『回想』を中心的資料としてチェルヌィシェフスキーと第一次「土地と自由」との関係を検討した一つの試論であるが、検討にあたって『回想』をもっとも厳密にテキスト・クリティークしたC・A・レイセルの版[2]を典拠にした（なお本稿は『「檄文の時代」におけるチェルヌィシェフスキー』と題する未発表の草稿の一部に若干手を加えた未定稿である）。

一

一八六一年四月のベズドナの蜂起に代表されるような農奴解放令公布直後の激しい農民騒乱、六一年秋の学生運動の高揚、ポーランドの民族解放運動、立憲運動、さらに『大ロシア人』を皮切りとする檄文の出現――これらは急進主義者たちの反政府運動にいわば現実的基盤をあたえたが、一方においてこれら急進的インテリゲンツィアと農民との間の断層は深く、さらに急進運動自体にもいまだ思想的・組織的統一はなかった。したがって、急進運動の統一こそが急務であるという認識は急進主義者の広く抱くところであったといえよう。H・A・セルノ＝ソロヴィエーヴィチが書いたといわれる『大ロシア人への回答』、オガリョーフの『大ロシア人への回答に対する回答』（『コロコル』、一八六一年九月一五日付第一〇七号および一〇月一日付第一〇八号）は組織問題やいわゆる革命的少数派の理解において相違点を残しながらも急進運動の組織的統一と秘密結社の設立の最初の呼びかけであった[3]。

このような呼びかけに呼応して組織的統一の準備がはじまったのは、H・A・セルノ＝ソロヴィエーヴィチとH・H・オー

ブルチェフが国外からペテルブルクに戻ったのち、つまりスレプツォーフの『回想』によれば一八六一年の「一〇月末」であった（レイセル版二六八頁、以下レイセル版からの引用は頁数のみ記する）。さらにスレプツォーフは六二年春にH・A・セルノ＝ソロヴィエーヴィチ、H・H・セルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟、スレプツォーフ、オーブルチェフ、B・C・クローチキンの五人が「未来のまだ形成されていない結社のセンター」になったとし、このセンターの当面の仕事は新しいメンバーを募り組織することであったと述べている（二六八）[4]。さらにかれらは合法・非合法の出版物や「チェス・クラブ」、「文学者救済基金」などの合法的組織への参加を通じてその基盤の拡大に努めたが、とくにロシア各地方の既存グループと接触し、また地方に新しい組織をつくることはもっとも重要な課題であり、このためにスレプツォーフがヴォルガ流域地方に派遣された（二六八）。

スレプツォーフによれば、この秘密結社の組織方法は五人で構成されたセンターの各メンバーがさらにそれぞれ五人のメンバーを組織して組織を拡大するいわゆる「五人組」制度であり、そのさいセンターのメンバーはオガリョーフの『人民には何が必要か？』（『コロコル』、一八六一年七月一日付第一〇二号）に基本的に賛同するすべての人びとを広く組織し、この意味でオガリョーフの論文は「われわれの綱領」であった（二六八）[5]。さらにこの論文の冒頭の文章、「きわめて簡単である。人民には土地と自由が必要なのだ」[6]からこの結社は六二年八月中旬に「土地と自由」という名称を名乗った（二六八、二七五）[7]。

二

さきに述べたように「土地と自由」の中心的メンバー、とくにH・A・セルノ＝ソロヴィエーヴィチはチェルヌィシェフスキーと親密な関係にあり、かれらがチェルヌィシェフスキーの思想的影響のもとにあったことは明らかである。しかしチェルヌィシェフスキーが「土地と自由」の設立にどのような積極的役割を果したのか、さらにかれが「土地と自由」に直接に参加したか否かという点についてはあまり明瞭ではなく、この点についての研究者の評価も大きくわかれている。その主な理由は、この問題に関する直接的資料がスレプツォーフの断片的回想以外にほとんどなく、しかもレームケによって最初に発表されたスレプツォーフの『回想』とその後妻のM・H・スレプツォーヴァが夫のメモ等にもとづいて発表した『回想』とがこの点に関して大きく食い違っているからであると考えられる。

スレプツォーフがはじめてチェルヌィシェフスキーと会ったのは一八六一年の五月ないし七月であり[8]、かれはこの時の二回にわたるチェルヌィシェフスキーとの話し合いの模様を対話形式でヴィヴィットに描いており、この部分は当時のチェルヌィシェフスキーの考えを知るうえできわめて興味深いのでやや詳しく紹介しておきたい。スレプツォーフが描いている両者の対話は断片的で多岐にわたっているが、大別すると第一にゲルツェンとの関係、第二に秘密結社の設立と檄文の作成の二つの問

題に分けることができる。

第一回の話し合いはチェルヌィシェフスキーのゲルツェンについての質問ではじまっており、これについてスレプツォーフはつぎのように書いている。

「さて、外国からこられたあなたはむろんそこでゲルツェンとお会いになった……」

「会いました……」――わたしはこの言葉をおそらくわたしの話し相手がそのあとに必ず「しかし」と聞くような表情をこめて言った……

わたしはロンドンへの旅行から得られた自分の印象を話したかったがためらった。わたしは「偉大な追放者」を自分があまり尊敬していないことをただちに示す決心がつかなかった。わたしははじめからチェルヌィシェフスキーを自分から遠ざけることを恐れ、かれにもっと近づきたかった……

チェルヌィシェフスキーのまなざしには驚きのようなものがあらわれた。かれの顔つきはよりまじめになった。かれはロシアの自由主義的心情の当時の支配者との出会いで浮き浮きした青年を迎えることを期待していたようだった。

「どういうわけですか？　あなたはかれに賛成していないようですが？」

わたしはそこでもわたしの疑問を話す決心がつかなかった……わたしの心のなかにあったのがたんなる疑問にすぎず、しっかりできあがった意見ではなかったからにほかならない。わたしはまだつい最近まで実際にゲルツェンを新しい運動の中心および指導者と考えていた。かれとわたしとの間には決定的な争論は起っていなかった。かれは極端なうぬぼれによって自らへの不信をわたしのうちに植えつけたが、動きはじめたロシアに対するかれの関係、かれの見解、意見をわたしはまだ充分に考えられなかった……（二六四―二六五）

こうしてスレプツォーフはゲルツェンのいわゆる「自由主義的動揺」に疑問を抱きながらもチェルヌィシェフスキーの質問に直接に答えなかった（「わたしは心のなかでまだできあがっていない否定を打ち明けることを避けた」）（二六五）。だから二回目の話し合い[9]のはじめにチェルヌィシェフスキーは再びこの問題に戻ってスレプツォーフにむかってこう言った。「わたしはどれだけあなたがロンドンの IIP/JH[10] に心を惹れているかということも同様にまえもって知っておきたかったのです」（二六七）。

スレプツォーフの回答はあまり明瞭でないとはいえ第一回の話し合いの時よりもはっきりしており、「わたしは『コロコル』をとくに注意深く熟読しなかったことを認めたが、ツァーリへの呼びかけに困惑しており、ところがここでもセルノ＝ソロヴィエーヴィチがツァーリに呼びかけたと聞いています」と述べている（二六六）。これに対してチェルヌィシェフスキーはつぎのように言っている。

「あなたはセルノ＝ソロヴィエーヴィチを知っているのですか？」

「リツェーイ（貴族学校）の同窓生として。」

「よい人間だが空想家です。しかしかれにとってそのことは第一歩なのに、ゲルツェンは〔それに〕固執しています」（二六七）。

第二の問題について、まず革命的組織に関する意見を聞きたいというスレプツォーフの希望に対してチェルヌィシェフスキーはこう質問している。「よろしい、秘密結社を組織することを考えているのですか？」（二六六）。

スレプツォーフによると、この時「チェルヌィシェフスキーは身ぶるいした。いまやっとわれわれの会見はかれにとってある意味をもちはじめたようだった」（二六六）。スレプツォーフはこの質問にこう答えた。

「秘密結社？　わたしはとくにそれを考えたのではなく、われわれはまず力を見さだめ、しっかり結びつかなければならないと考えただけです。」

「よろしい、それが肝要な事です」とチェルヌィシェフスキーははっきりと言った（二六六）。

ついで、「すでにここでも檄文があらわれましたね」というスレプツォーフの言葉をめぐって二人の間につぎのような会話がかわされた。

「で、それらはあなたを満足させていますか？」

「どうあなたに答えるべきかわかりません。満足でもあり、満足でもありません。始めとしては満足しています。ただ呼びかけている層を知らないのでなんとも言うことは難しいです……ところで……」

「種を播くためにはどんな土壌かをまず見さだめなければならないでしょう。そうそう、六三年に農民運動がおこるだろうという噂ですが……おこるでしょうかね？」

ここで〔チェルヌィシェフスキーは〕答えをださないで、同時に質問した(11)。

「で、あなたは檄文の作成を試みてみましたか？」

「いや、できるとは思いません――相手を知らないのですから。」

「だが、もしもそれでもなおやらなければならないならば……どうあなたが書くかを見るのが楽しみですね。」

「さあ、やってごらんなさい。わたしは数日中になんとかしてあなたのところに立ち寄りましょう、もっと詳しく話し合いましょう」（二六六）。

二回目の話し合いの時にもチェルヌィシェフスキーは再び檄文の作成の問題に戻ってスレプツォーフにたずねている。

「……でどうです、なにか書きましたか？」

「書きました……文句は……検討しました。きっとわたしは誰に呼びかけるべきかを知らないのに違いありません……」（二六七―二六八）。

ここで二人は呼びかける相手の選択をはじめたが、そのさいにチェルヌィシェフスキーはペテルブルクだけでなく地方にも注意をむけるように勧め、「ここで、それから地方を捜してごらんなさい」と述べている（二六八）。

スレプツォーフはオーブルチェフの手紙をもってチェルヌィ

シェフスキーを訪れ（二六三）、チェルヌィシェフスキーも二回目の話し合いの冒頭で「H・H・オーブルチェフはわれわれがなににについて話し合わなければならないかをわたしに知らせてきました。だから、わたしはすぐにそれに取り掛りもし……すぐにあなたを自分の部屋に案内もしたのです」（二六七）と言っていることから当時国外にいたオーブルチェフがスレプツォーフとチェルヌィシェフスキーの会見の仲介をしたことは明らかである。このことから、西ヨーロッパでオーブルチェフがスレプツォーフと会う以前にチェルヌィシェフスキーとオーブルチェフとの間に秘密結社の組織に関するいわば事前協定があったという推測がなされ[12]、さらにその後の「土地と自由」を組織することを決定したこの事前協定にオガリョーフ、セルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟、チェルヌィシェフスキー、オーブルチェフがかかわっていたとする説がある[13]。

しかしスレプツォーフとの話し合いのさいにチェルヌィシェフスキーが二回ともスレプツォーフのゲルツェンに対する考えについて質問し、またゲルツェンとセルノ＝ソロヴィエーヴィチとの相違を強調していることからわかるように、チェルヌィシェフスキーはゲルツェン（したがってオガリョーフ）に対して強い疑問・不信感を抱いていた。このことはチェルヌィシェフスキーの『ローマ没落の諸原因について』（『同時代人』一八六一年五月号）におけるゲルツェン批判[14]や六一年七月末ないし八月初めのH・B・シェルグノーフ宛の手紙でオガリョーフが、「青年たちを文学的結社（政治的組織――引用者）に引きこまないように、このことからなにもでてこない」というチェルヌィシェフスキーのゲルツェンへの忠告に対する強い不満を述べていることからも明らかである[15]。したがって、すくなくとも六一年夏の初めにチェルヌィシェフスキーが「ロンドン」と「ペテルブルク」との組織的統一を目論んでいたとは考えられない。

一方スレプツォーフとの対話にみられるように、秘密結社の設立や檄文の作成についてチェルヌィシェフスキーは積極的態度を示している。このような態度はすでに檄文『地主農民にかれらの幸福を願うものより挨拶を送る』を書き、さらに六一年一一月の論文『変化のはじまりではないか？』において農民運動と急進的インテリゲンツィアとの関係の問題を展開するチェルヌィシェフスキーにとっては当然のことであろう。しかし、このことから当時すでにペテルブルクにチェルヌィシェフスキーの参加した革命的秘密結社が存在していたという推測は速断であろう。さきの「まず力を見さだめ、しっかり結びつかなければならない」というスレプツォーフの考えに賛成し、さらに「種を播くためにはどんな土壌かを見さだめなければならない」と語っていることにもみられるように、秘密結社の実際の設立にあたってのチェルヌィシェフスキーの考えはむしろきわめて慎重であったといえよう。

さきに述べたように、スレプツォーフの『回想』によれば、のちの「土地と自由」となる秘密結社の準備は一〇月末にはじまったわけであるが、その後かれらは学生の間で組織活動をおこない、さらにジャーナリストたちにも働きかけた。その結果、

クローチキン兄弟、ブラゴスヴェトロフらは結社に参加し、Π・Л・ラヴローフとΓ・3エリセーエフも「顧問的メンバー」になった（二六九）。しかしスレプツォーフはチェルヌィシェフスキーについてはつぎのように書いている。

「チェルヌィシェフスキーは事情が違っていた。ニコライ・カヴリローヴィチはセルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟と話し合い、かれらの話しを非常に注意深く、燃えるような目つきで、またたゆまざる関心で終りまで聴き、かれらがその報告を終えた時、こう言った。『わたしにとって、ニコライ・アレクサンドロヴィチ〔ドブロリューボフ〕の病気とネクラーソフにいまの雑誌を一人で経営する能力がないこととが事を決めなければなりません。わたしはいま同時に『同時代人』とあなた方のもとで、失礼、あなた方といっしょに仕事をすることは肉体的に不可能だと考えます。われわれの病人のことが判明するまで待ってください。かれが以前と同じように働けることがわかる時、一カ月後に事情が違ったわたしはあなた方とともに、だがやはり『同時代人』とともに働くでしょう。それはあなた方がその一般的論調に賛同している限り、わたしにとっても、あなた方にとっても失ってはならない演壇としてわたしには貴重なのです』……しかし、チェルヌィシェフスキーは生れつつあった結社（当時まだ名称をもたなかったが）の仕事に関心をもち、かれのもとに時々訪れた兄弟との、またわたしとの会見のさいには、かれの妻さえいなければいつも、われわれの当面の計画を批判したり、忠告をあたえたりした」（二六九―二七〇）。

秘密結社設立の準備は六一年一〇月末にはじまり、ドブロリューボフが死んだのは一一月一七日であるからこのセルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟とチェルヌィシェフスキーとの話し合いは多分一一月初めと考えられる(16)。したがって、チェルヌィシェフスキーが六二年七月七日に逮捕されるまで約八カ月の期間があったことになるが、この間かれが結社に関心をもち、忠告をあたえたと書いているにも拘らず、スレプツォーフはさきの六二年春の「結社のセンター」の五人のメンバーにチェルヌィシェフスキーを入れていないし、またかれの『回想』のその他の箇所にもチェルヌィシェフスキーが結社に参加したという記述はない(17)。

しかしさきに述べたように、スレプツォーヴァが書いた『回想』はチェルヌィシェフスキーと「土地と自由」との関係についてレームケ版のスレプツォーフの『回想』とつぎのように大きく食い違っている。すなわち「チェルヌィシェフスキーははじめの五人組に加わっていただけでなく、その主唱者であり、その第一のメンバーであった。その構成員はつぎのとおりであった。すなわちチェルヌィシェフスキー、ニコライ・セルノ＝ソロヴィエーヴィチ、アレクサンドル・スレプツォーフ、ニコライ・オーブルチェフおよびドミトリー・プウチャータ。『大ロシア人』のモスクワ・サークルのメンバーであるニコライ・オーブルチェフはこうしてモスクワの組織とチェルヌィシェフスキーの五人組との連結環であった」（二七九）(18)。

こうしてスレプツォーヴァは、チェルヌィシェフスキーのイ

ニシアチブによってのちに「土地と自由」になる最初の五人組のサークルが設立され、かれはその中央委員会のメンバーであったとしている。チェルヌィシェフスキーと「土地と自由」との直接的関係を肯定的にみる研究者はこのスレプツォーヴァの『回想』を重要な典拠としている。[19] しかしこのスレプツォーヴァの『回想』は資料として多くの問題がある。スレプツォーヴァ――マリア・ニコラエヴナ・ラヴローヴァ――は一八六一年に生れ、一八八一年にスレプツォーフの三人目の妻となり、一九三三年にその『回想』を発表している。彼女の『回想』は彼女が記憶しているスレプツォーフの話し、夫の死後レームケに移譲された『回想』ノート以外に彼女の手元に残った若干の文書その他にもとづいて書かれている。したがってスレプツォーヴァは、彼女が生れた頃の「土地と自由」について、すでに革命運動から離脱したスレプツォーフから約二〇年後に聞き、さらにその約五〇年後にその話し等にもとづいて『回想』を書いたことになるわけだが、彼女はあたかも夫といっしょに当時の運動に参加していたかのごとくに書き、[20] しかも一八六一年一〇月まで国外にいたオーブルチェフを六一年夏のチェルヌィシェフスキーの五人組のメンバーに入れるなど事実上の誤りも多い。[21] このため、スレプツォーヴァの『回想』を非常に省略して『ズヴェーニャ』に掲載した編集者もこの『回想』は「信憑性のある資料」とみなされえないと述べ、[22] Ш・М・レーヴィンも「誤り、アナクロニズムが多い」としている。[23] これらのことからスレプツォーヴァの『回想』を無批判的に典拠にすることは問題である。たしかに資料としての確実性の点では、事件の約四二年後に書かれたスレプツォーフの『回想』にも問題があるといえる。[24] しかしスレプツォーフの『回想』はスレプツォーヴァの『回想』のいわば原典であり、したがってスレプツォーヴァの『回想』とレームケの発表したスレプツォーフの『回想』とが大きく食い違う場合には、後者に拠ることがより妥当であろう。[25]

三

こうして現在の資料的制約のもとでは、チェルヌィシェフスキーと「土地と自由」との関係を充分に明らかにすることはできないが、唯一の直接的資料ともいうべきスレプツォーフの『回想』に依拠するならば、チェルヌィシェフスキーはのちに「土地と自由」になった秘密サークルに関心をもちつづけ、その計画について忠告をあたえたとはいえ、かれはこの秘密サークルの設立の主唱者ではなく、またこのサークルに直接参加しなかったということになる。ただ、このサークルのメンバーに対するかれの影響力はきわめて大きく、この意味でチェルヌィシェフスキーは「土地と自由」の設立と活動の思想的指導者であったといえよう。[26]

ウォーリンも述べているように、当時の段階において秘密サークルへの参加と助言との相違はたいして大きくないとはいえ、[27] 自ら農民にむけた檄文を書き、農民運動と結びつく急進的インテリゲンツィアの組織の必要性を再三にわたって強調したチェルヌィシェフスキーがなぜこの秘密サークルに直接参加しなか

ったのかということは、やはり当時のかれの思想と行動を考察するうえで重要な問題として残るであろう。この問題については、およそつぎの三つの事情が考えられる。

第一はいわば状況論である。まずチェルヌィシェフスキー自身がセルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟に語っているような事情によって当時かれが『同時代人』を離れられなかったことは確かであろう。しかしさらにチェルヌィシェフスキーに対する第三部の監視が強化されたという事情もある。六一年九月一日にM・Л・ミハーイロフが檄文『若き世代へ』の流布のかどで逮捕され、九月二四日にはペテルブルク大学が閉鎖されて学生運動の高揚がはじまったが、すでにこの時期にチェルヌィシェフスキー逮捕の噂が広まり、チェルヌィシェフスキーも一〇月三日付の父親への手紙にペテルブルクからの噂について心配しないようにと書き送っている。[28] 九月二五日の学生のデモのさいにかれが街頭にでてデモの学生たちと話していたという情報が警察にもたらされたが、一一月一五日にはチェルヌィシェフスキーの監視・尾行が公的に決定されて、かれの家に出入りするすべてのもの、かれの訪問先、かれへの郵便物について細大もらさずほとんど毎日のように報告されるとともに、かれの家に雇われた女中も第三部によって買収された。[29] また一一月二三日には内務大臣ヴァルーエフから各県知事に対してチェルヌィシェフスキーに国外旅券を交付しないようにという内密の回章がだされた。[30] このようなきびしい監視体制のもとでは、たとえチェルヌィシェフスキーが秘密サークルに直接参加したとしても実際的な活動は不可能であったろうし、かれが非合法活動に従事するよりも『同時代人』を通じて急進的青年たちに対するその影響力を活用したほうが革命運動にとってより有益だと考えたであろうという推定はなりたちうる。事実、この時期のかれの行動はきわめて慎重であったが、『変化のはじまりではないか？』（六一年一一月）、『かれらは学んだか？』（六二年四月）などにみられるようにかれの論調は一層鋭くなっている。

第二はゲルツェンとの関係である。セルノ＝ソロヴィエーヴィチ兄弟、オーブルチェフ、スレプツォーフなど秘密サークルの中心メンバーはほとんどすべてロンドンでゲルツェン、オガリョーフと密接な結びつきをもっていた。一方五九年六月のロンドン訪問以来、チェルヌィシェフスキーのゲルツェンに対する批判はツァーリへの期待、自由主義者との関係、「ロシア社会主義」論、アポリティズムなどの点において強まりこそすれ緩和することはなく、かれらの対立・論争は両者の歴史観の相違に深く根ざしていたといえよう。[31] スレプツォーフとの会見のさいにチェルヌィシェフスキーがかれにゲルツェンとの関係を執拗に質問したのはこのゆえであり、チェルヌィシェフスキーが秘密サークルの中心メンバーとゲルツェンとの関係、かれらへのゲルツェンの思想的影響に疑問をもっていたことも当然予想される。チェルヌィシェフスキーがゲルツェンの影響からかれらを引き離そうとしていたことは、「青年たちを……」というさきのかれのゲルツェンへの忠告にもっとも明瞭にあらわれている。

しかし第三に、このゲルツェンへの忠告を文字通りの意味に理解することもまた可能であろう。バンチェレーエフやH・Я・ニコラーゼの『回想』にもみられるように[32]、チェルヌィシェフスキーは革命の最終的勝利の必然性を確信しながらも、その過程には幾多の「満潮と干潮」があること、さらに革命運動の未成熟・弱さと戦うべき相手の強さについて繰り返し青年たちに説いている。このような革命の最終的勝利への信念と革命運動のきわめてリアルな現状認識とが、チェルヌィシェフスキー自身に秘密サークルへの参加をためらわせ、同時にかれらの活動に対する積極的批判や助言をあたえるという一見矛盾した行動をとらせたのではあるまいか。そしてこの一見矛盾した行動にチェルヌィシェフスキーにおけるいわば「革命的ロマンチシズム」と「革命的リアリズム」との葛藤の反映をみることができるといえよう[33]。

（1） スレプツォーフの『回想』は通常の回想とはきわめて異なった経緯と形体をとっている。まずかれはかれ自身が「土地と自由」の運動に参加していた一八六〇年代初めに一種の日記的メモを書いたが、このメモはかれの亡命中（一八六三―六八年）に弟のニコライによって焼却されてしまった。ついでかれは約四二年経過した晩年（一九〇四年末から一九〇六年の死去まで）に多分M・K・レームケの助言によって事件の『回想』を書きはじめた。この執筆の動機はバンチェレーエフが一九〇四年一一月から一九〇五年一月にかけてペテルブルクの新聞《Наша жизнь》に掲載した『回想』に対してかれが強い不満をもったことにあった。スレプツォーフの『回想』ははじめ全体で三部の構想だったが、結局第一部が書かれただけで未完成に終った。さらに老年で病床にあったかれにレームケが質問していわば『聞き書きメモ』が作成された。かれの死後『回想』ノートは妻のM・H・スレプツォーヴァからレームケに移譲された。はじめレームケはこの『回想』ノートを別個に公刊する予定だったが、その後かれの編さんしたゲルツェン全集の注釈（А. И. Герцен, Полное собрание сочинений и писем. Под ред. М. К. Лемке, т. X, 1919, стр. 224, 425―427; т. XVI, 1920, стр. 72―100, 338）および自著（Политические процессы в России 1860-х гг., изд. 2, М.-Пг., 1923, стр. 318）に『回想』ノート、『聞き書きメモ』を断片的かつかなり不注意に挿入・引用した。これらには矛盾した箇所があり、また『回想』ノート自体が消失したため一時期その真偽が疑われたが、一九一三年にレームケから『回想』ノートを借用してその一部を写したM・H・チェルヌィシェフスキーのコピーがB・Э・ボグラートによって発見され、『文学遺産』（В. Э. Богрaд, О мемуарах А. А. Слепцова, 《Литературное наследство》, т. 67, 1959, стр. 669―684）に発表されたことによってこの疑問は解消した。これよりさき、一九三三年にスレプツォーヴァの『回想』（М. Н. Слепцова, Штурманы грядущей бури. Из воспоминаний, 《Звенья》, вып. II,

M.-Л., 1933, стр. 386—464) が発表され、ここでもスレプツォーフの『回想』が引用されている (С. А. Рейсер, Воспоминания А. А. Слепцова. «Н. Г. Чернышевский, статьи, исследования и материалы», т. 3, Саратов, 1963, стр. 249—252; Воград, Указ. статья)。

(2) レイセル版は全体で三二項目、すなわち第一はスレプツォーフの『回想』ノートの断片 (一—一七)、第二はレームケによる『聞き書きメモ』の断片 (一八—二九)、第三はスレプツォーヴァの『回想』の断片 (三〇—三二) からなっている (Рейсер, Воспоминания А. А. Слепцова…, стр. 258—280)。なおレイセルの詳細なテキスト・クリティークについては最小限の注記にとどめた。

(3) 『大ロシア人への回答』、『大ロシア人への回答に対する回答』の大意は、外川継男『檄文の時代—人民主義の発生をめぐる若干の資料と解説』(『スラヴ研究』、第一六号、一九七二年三月) に訳載されている (同上、一六六—一六七、一六九—一七一頁)。

(4) バンチェレーエフの『回想』は「一八六二年の復活祭」つまり四月初めにかれがН・И・ウーチンの部屋でスレプツォーフ、С・ルィマレンコと会いウーチンとともに新しく組織された秘密結社に入ったことを伝えている (Л. Ф. Пантелеев, Воспоминания, М., 1958, стр. 290—293)。

(5) しかし、『人民には何が必要か?』はむろん「土地と自由」の統一的綱領ではなく、レーヴィンは「土地と自由」の厳密な意味での綱領は公表されなかったと述べている (Ш. М. Левин, Общественное движение в России в 60—70-е годов, М., 1958, стр. 214.)。

(6) Колокол, Факсимильное изд. М., 1962, вып. IV, стр. 853.

(7) 本稿では紙数上の制約のため「土地と自由」自体の検討は省略する。ソビエトではとくに《Революционная ситуация в России 1859—1861 гг.》, М., 1960 以後、「土地と自由」に関する多数の研究論文・研究書が発表されているが、Я. И. Линков, Революционная борьба А. И. Герцена и Н. П. Огарева и «Земля и воля» 1860-х годов, М., 1964 がかなりまとまっている、日本の研究としては、外川継男、前掲論文および『二つの論争 (Ⅱ)』(『スラヴ研究』、第一七号、一九七三年三月) 参照。

(8) レームケは七月としているが (Герцен, т. X, стр. 425)、スレプツォーヴァは五月としている (Слепцова, Указ. статья, стр. 403)。なお Левин, Указ. соч., стр. 208; Линков, Указ. соч., стр. 168 参照。

(9) レームケ版のゲルツェン全集には第二回目の話し合いは収録されていない。Воград, Указ. статья 参照。

(10) このПРЛН という意味不明の言葉をレイセルは《Полярная звезда》(北極星)、リンコフは《пропаганда》(宣伝) と推量している (Рейсер, Указ, статья, стр. 267; Линков, Указ. соч., стр. 165)。

(11) レームケ版のゲルツェン全集ではこの文章全部が欠如しており、このためにつぎの質問をスレプツォーフがチェルヌィシェフスキーにおこなったという逆の順序になっている (Богрд, Указ. статья, стр. 678 参照)。

(12) Линков, Указ. соч., стр. 169.

(13) М. В. Нечкина, Возникновение первой «Земли и воли», РСР, М., 1960, стр. 293—294.

(14) 拙稿『チェルヌィシェフスキーの農村共同体論』、『茨城大学政経学会雑誌』第二三号、昭和四三年一二月、七七—七八頁参照。

(15) Н. П. Огарев, Избранные социально-политические и философские произведения, т. II, М., 1956, стр. 451. この「文学的結社」はチェルヌィシェフスキーの裁判の供述からも明らかなように「政治的組織」である (Н. Г. Чернышевский, ПСС, т. XIV, стр. 725—726; Линков, Указ. соч., стр. 192—193)。

(16) W. F. Woehrlin, Chernyshevskii. The Man and the Journalist, Harvard University Press, 1971, p. 307. Н・М・チェルヌィシェフスカヤは一〇月末としている (Н. М. Чернышевская, Летопись жизни и деятельности Н. Г. Чернышевского М., 1953, стр. 224)

(17) レイセル版の八項には「チェルヌィシェフスキーの五人組」という言葉 (二七二) があるが、これはスレプツォーヴァの『回想』からの収録 (二八一) であり、同じ五人組について述べているレームケ版＝レイセル版の九項 (二七二) にはこの言葉はない。したがって本文で述べているような理由によってレームケ版を採用した。

(18) さらにスレプツォーヴァはこの文章の脚注でつぎのように書いている。「たしかに、チェルヌィシェフスキーは生れつつあった結社の実際的仕事にはまだ参加できないと言ったが、これはあとで組織された『土地と自由』における実際的仕事を意味している。そして実際にチェルヌィシェフスキーがたとえば地方の委員会やサークルを組織しにキーエフに旅行するためにかれの文筆活動を投げ捨てておけただろうか。しかしかれは中央委員会のメンバーであった」(Слепцова, Указ. статья, стр. 404)。

(19) たとえば Нечкина, Указ. статья. さらにヴェントゥーリもチェルヌィシェフスキーが秘密結社の尚早な組織に反対であったことを指摘しながらも、スレプツォーヴァの『回想』を典拠として、結局「土地と自由」に参加したとしている (F. Venturi, Roots of Revolution, New York, 1960, pp. 171, 269 n 41)。

(20) Рейсер, Указ. статья, стр. 252.

(21) Woehrlin, op. cit., p. 310.

(22) Слепцова, Указ. статья, стр. 386.

(23) Левин, Указ. соч., стр. 208.

(24) 注 (1) 参照。

(25) Woehrlin, op. cit., p. 310.

(26) Ю. М. Стеклов, Н. Г. Чернышевский, его жизнь и деятельность (1828—1889), СПб., 1909, стр. 91—92; там же, изд. 2-е, М.-Л., т. II, стр. 271 参照。

(27) Woehrlin, op. cit., pp. 307—308.

(28) Чернышевский, ПСС, т. XIV, стр. 441.

(29) チェルヌィシェフスキーに対する第三部の監視の詳細については、Н. Г. Чернышевский в донесениях агентов III отделения. С предисловием А. Шилова,《Красный архив》, 1926, т. XIV, стр. 84—127 参照。

(30) Лемке, Указ. соч., стр. 199.

(31) この問題は別稿『ゲルツェンとチェルヌィシェフスキー』で検討する。

(32) バンチェレーエフによれば、チェルヌィシェフスキーの話は「爆動のようなものからほど遠かった…反対にかれは機会あるごとにはじまりつつあるすべての解放運動がいかなる困難と戦わねばならないか、敵の力がいかに強く、かれらがいかに闘争に練達しているかを強調した…青年たちの運動を慎重に注視し、熟知し、かれらに心から共感しながらも、Н・Гは若い世代の過大評価からほど遠かった。青年たちの熱烈な擁護(『かれらは学んだか?』)においてさえも、当時青年に関する見解に広く現われていたようなセンチメンタリズムの影すらまったくみられない」(Пантелеев, Указ. соч., стр. 465)。また学生運動の指導者の一人ニコラーゼによれば、「かれは人民の不活発な力を明瞭に理解し、進歩と勝利がただちにやってこず、数度の、非常に多くの満潮と干潮があることを知っていた。むろん結局正義と理性が勝つだろうが、それはすぐではなく、善の支配のための戦いで数世代が戦死するだろう—かれはこのことをわれわれ青年に隠さなかった…かれにおいてなによりもわたしを驚かせたこと、それはわたしにさえ素朴と思われたほどの正義の不敗の力への信念である。すべての理性的なものは不敗で、進歩はとどまることなく、永遠であるとかれは確信していた。さらにかれにはナロードという偶像があった。真理の種子が一度ナロードのなかに落ちたならばそれはよい土壌に当らざるをえない。それは必ず発芽して、つねに有用な豊かな実りをもたらすだろう。幾度もわたしはこのテーマについてかれと論争した。その時、かれの皮肉はどこへいったのか? まれではあるが、この瞬間にかれはもはや伝道者、狂信者のようであった」(Н. Я. Николадзе, Воспоминания о шестидесятых годов,《Н. Г. Чернышевский в воспоминаниях современников》, т. I, Саратов, 1958, стр. 398)。

(33) チェルヌィシェフスキーにおけるこの「革命的ロマンチシズム」と「革命的リアリズム」の問題は別稿で検討したい。

(茨城大学教授)